

知ること。伝えること。

— 那須農場の歩みを、未来へつなぐ —



自由学園創立者・羽仁もと子・吉一先生が掲げた「生活即教育」。それは、生活こそ教育そのものであるという考え方です。

那須農場は、その理念を実践する場として、1941 年(昭和 16 年)の開拓以来、多くの人々に支えられながら歩みを続けてきました。開拓農場から酪農農場へ、そして教育農場へ。その歴史には、多くの人々の働きや思いが受け継がれています。

那須農場支援活動では、作業を終えた夕食の時間に、先輩方が那須農場の歴史や思い出を語ってくださることがあります。そのお話は参加者にとって大変貴重な時間ですが、その場に居合わせた人しか聞くことができません。

そこで、この「知ること。伝えること。」では、那須農場支援活動の中でお話いただいた内容をもとに、その歩みや思いを多くの方へお届けします。

このシリーズでは、開拓から教育農場への歩みをたどるだけでなく、その歴史が東日本大震災後の卒業生による那須農場支援へどのようにつながっていったのか、そして現在の活動へどのように受け継がれているのかを、関わってこられた方々のお話を通してご紹介していきます。

これから支援活動に参加される方には働くことの意味を、これまで参加された方には新たな発見を、そして遠方などの理由で参加がかなわない方にも、現在の那須農場の歩みを感じていただければ幸いです。

知る事。伝える事。

高原高

岳須知

小兒驚風

大正四年

卷之四

培系通集

自由學園
農場教地
(七十七回五及步)

西那復野驛

驛野須那索

黑發

第一回

幼方英次郎先生が語る「那須農場の歩み」

シリーズ第一回では、那須農場支援活動の中で幼方英次郎先生にお話しいただいた「那須農場の歩み」をもとに、内容をできるだけ忠実に整理し、読みやすい形にまとめました。

幼方先生は、自由学園初等部の教師を務められた後、那須農場主任として長年にわたり農場の運営と教育に携わってこられました。

今回は、そのご経験を通して、開拓から酪農農場、そして教育農場へと歩んできた那須農場の歴史をお話しいただきます。



第1章

開拓から 酪農農場へ

1941 年の開拓から始まった那須農場。

時代とともに姿を変えながら受け継がれてきたその歩みは、東日本大震災を経て、卒業生による支援という新たな形へとつながっています。

那須農場は 80 年以上にわたり、その姿を変えながら歩み続けてきました。



雑木林から始まった那須農場

自由学園は目白から東久留米へ移転した後、男子部の教育の場としてさらに広い土地を求め、1941（昭和16）年に那須農場を開設しました。

しかし、当時そこにあったのは現在のような農場ではありませんでした。

一面に雑木林が広がる未開拓の土地。

農場の脇を流れる蛇尾川の川底近くまでが自由学園の所有地で、「なぜこんな土地を買ったのだろう」と言われるような場所だったそうです。

そこから、生徒たちによる開拓が始まりました。木を切り、切り株を掘り起こし、少しずつ土地を開いていきます。

作業中は簡単な休憩所を設け、宿泊は近くのお寺を借り、そこから毎日農場へ通って開墾を続けました。

当時は戦時中。農業経験のない生徒たちでしたが、「働け」と言われれば懸命に鍬を握り、農場づくりの第一歩を支えました。





「分からないことは 専門家の門をたたきなさい」

農場づくりの中心にあったのは、創立者・羽仁吉一先生の考え方でした。

「分からないことは、専門家の門をたたきなさい。」

その言葉どおり、県や国の農業試験場へ足を運び、新しい技術や知識を学び、農場で実践しました。そして、試した結果を必ず試験場へ報告しました。当時、農家が試験場へ出向くことは珍しかったそうですが、自由学園は積極的に学び、その成果を共有しました。その姿勢が試験場との信頼関係を築き、新しい知識や技術が次々と農場へ取り入れられていったのです。

馬とともに始まった農業

もちろん、当時はトラクターなどありません。農作業は馬が頼りでした。朝5時から馬を働かせるためには、朝3時に起きて餌を与えなければなりません。

そうした生活を積み重ねながら、農場は少しずつ形になっていきました。男子部の生徒たちは脚絆を巻き、那須塩原駅から農場まで歩いて通いました。途中で肥料屋さんの車に乗せてもらった生徒が見つかり、「ふざけるな」と叱られて元の場所まで戻され、そこから歩き直したという話も残っています。





農学塾の誕生

1947（昭和 22）年には農学塾が設立されました。中学や高校を卒業した地元の若者や友の会関係者が集まり、農業を学びながら農場を支えました。戦後間もない頃の農場には、食料を増産し、学園へ送り続けるという大きな使命がありました。サツマイモ、陸稲（おかぼ）、野菜、果樹などを育て、南沢の生徒達の食を支えました。

幼方先生が生徒として農場へ来ていた頃も農学塾生がおり、「本校の生徒」と呼ばれていたそうです。農作業では到底かなわず、「勝てるのはソフトボールくらいだった」と、幼方先生は笑いながら振り返られました。

梨畑で作業をしていると、塾生が先輩風吹かせて「お前たち、食え！」と言い皆で梨を食べましたが、大塚先生が来ると「散れっ」と静かに声をかけて逃げたことが今では懐かしい思い出だそうです。



農学塾生と本校の生徒のソフトボール対決



機械の説明を熱心に聞いている様子



農場での朝礼

一号トラクターがやって来た

～ 1955 年、那須農場の機械化が始まる～

1955（昭和 30）年、那須農場に初めてトラクターが導入されました。現在も農場に保存されている「一号トラクター」です。

しかし、イギリス製のトラクターに取り付ける農機具は、日本では手に入りませんでした。そこで活躍したのが、山口さんのお父様をはじめとする人たちでした。

戦時中、自由学園では航空機部品の製造に携わっており、その経験から旋盤やフライス盤を使った機械加工の技術を身に付けていました。戦後は、その技術を生かして農機具を自作し、那須農場の機械化を支えていきました。現在も当時の工作機械の一部は農場に残され、現役で動いているものもあります。





一号機が歩んだ 80 年

上：1955 年に導入された英国ファーガソン社製「一号機」は、那須農場の機械化を支え、長年にわたり農作業の第一線で活躍しました。

下：2026 年の青木農業祭で、「一号機」（手前）と会場に展示されていた最新のマッセイ・ファーガソントラクター（奥）を並べて撮影。現役時代から現在まで受け継がれてきた「ファーガソン」の歩みを象徴する一枚です。



那須の地で愛され続けるファーガソントラクター『一号機』

毎年4月に開催される那須塩原市の青木農業祭では、「トラクターライド」の主役として子どもたちを乗せて活躍しています。2026年には延べ420名以上を乗せ、約60往復しました。

このトラクターは、創立者・羽仁吉一先生が那須農場へ初めて導入した英国ファーガソン社製トラクターです。当時、那須地域でも先駆けとなる存在であり、那須農場最初のトラクターであることから、今も「一号機」の愛称で親しまれています。

80年以上を経た現在も現役で動き続けており、毎年このトラクターを目当てに県外からも多くの方が訪れるなど、那須農場の歴史を伝える象徴として、多くの人々に愛され続けています。



長らく故障したまま保管されていたものを、自由学園の学生たちが中心となって修復した経緯もあり、その様子は映像として残されています。

左記QRコードよりご覧ください。

または「動画ははこちら」をクリックしてください。

酪農の始まり

やがて乳牛を譲り受けたことをきっかけに、那須農場では酪農が始まります。最初の牛舎は、現在の子牛小屋でした。搾乳はすべて手作業です。

食事の時間になると、その日誰がどの牛を搾るかが発表され、生徒たちも担当を受け持っていました。

幼方先生が農場へ来られた頃も、農学塾の学生や職員が牛を搾る姿が日常の風景だったそうです。



全国に知られる 酪農農場へ



数々の受賞が、 その歩みを物語る

自由学園那須農場は、各地の品評会や共進会で高い評価を受け、多くの賞を受賞しました。その積み重ねが、栃木県代表として全国共進会へ五度出場することにつながりました。



酪農は少しずつ発展し、地下サイロから各種サイロ、さらに四角く梱包した飼料、現在のラップサイレージへと、時代に合わせて飼料づくりも変化していきました。こうした積み重ねにより、自由学園の酪農は全国でも高く評価されるようになります。農場には、その歩みを物語る数多くのトロフィーが今も残されています。そして、その成果は全国共進会という大きな舞台へとつながっていきました。

全国共進会の舞台へ

自由学園那須農場は、栃木県代表として全国共進会へ五度出場しました。
開拓農場から始まり、日々の積み重ねによって培われた酪農技術は、全国の
舞台でも高く評価されました。上は全国共進会の開会式、下は審査の様子です。





おわりに

那須農場の歴史を知することは、過去を振り返るためだけではありません。今、多くの卒業生や保護者が那須農場へ集い、働き続けている理由を知ることでもあります。私たちも那須農場支援活動に携わる中で、多くの先輩方のお話を伺い、その歩みや思いに触れることで、働くことの意味や、人とのつながりの大切さを改めて教えていただきました。そのようなお話は、これまで活動の中で限られた人だけが聞くことのできる貴重な時間でした。この「知ること。伝えること。」が、その思いや経験を一人でも多くの方へ届け、那須農場をより深く知り、支援活動へ参加するきっかけとなれば幸いです。

次回以降の予定

このシリーズでは、幼方英次郎先生のお話を軸に、那須農場を支えてこられた卒業生の皆さんのお話も交えながら、開拓から教育農場への歩み、そして東日本大震災後の那須農場支援活動へと受け継がれてきた思いをご紹介します。今回は、東日本大震災後の那須農場支援活動を長年支えてこられた阿部さんのお話をお届けする予定です。